

説教

聖日礼拝 北浜チャーチ
黒田禎一郎

2019年3月3日（日）

主 題：「舌 が も つ 力」

—祝される用い方—

テキスト：ヤコブの手紙3章3－5a節

はじめに

- ・ひと昔前ですが（1999.9.11）、米国ニューヨーク市郊外を走るメトロ・ノース鉄道の送電線に、一匹のリスが登りました。それが原因で電気の流れが不安定となり、車両の上にある受電装置（ブラケット）が正常に作動しなくなりました。その結果、電線の一部がぶら下がり状態となり、車両がそれをひっかけたために、送電線全体が破壊されてしまいました。その夜、約4万7000人の通勤者たちが、マンハッタン島で身動き取れない状態になりました。小さな一匹のリスが、甚大な被害をもたらしました。
- ・昨年9月、私たち夫婦はオーストラリア宣教に行きました。
神が創造された大自然の中に身を置くことが大好きな私たちは、時間をつくり国立公園を散策する機会を持つことができました。そこは雨林地帯で、高さ20数メートルもの大木がたくさん茂っていました。ふと横をみると、その大木が倒れて道路をブロックしていました。現地の方の話では、「白アリ」に食べられてしまい、大木が倒れたのだそうです。考えられないことですね。小さな白アリが大木を倒してしまいました。
- ・皆さん。聖書は次のように教えています。
3:5 同様に、舌も小さな器官ですが、大きなことを言って誇るのです。
私たちの舌は口の中にあります。外からは見えません。しかし、その舌が発する言葉には大きな力があります。
- ・ヤコブは3章1節で、言葉をつかう教師という責任の大きさを語りました。
2節では、言葉で失敗しない人はいない、と言いました。そして3、4節では、当時の生活の中にあつたものにたとえて、舌（言葉）について説いています。
- ・今日のテキストで、ヤコブは馬と船という二つの実例を挙げていまうす。
ご一緒に考えてみましょう。

大切なポイント

1. 「馬のくつわ」と「船のかじ」

1) 社会的背景

- ・まず、ヤコブがこの言葉問題の背景を語った理由から考えてみましょう。
彼がこの手紙を書いたのは紀元60年ごろ、ローマ帝国はネロが第5代皇帝でした。当時のローマ帝国全体は平和で、繁栄期に入っていました。旅行が自由にでき、商業も盛んでした。ネロ皇帝がクリスチャン迫害を迫害したのは、まだ4年後でした。

- このような社会状況下で、キリスト教会は平安の内に発展を続けていました。しかし、パウロやヤコブを退けた教会は、モーセの律法を引きずり形式重視、儀式重視のキリスト教でした。イエスが、モーセの精神を失った聖書（律法）学者や、パリサイ派の人々を弾劾された時と同じような状態になっていました。マタイも福音書

23:1 そのとき、イエスは群衆と弟子たちに話をして、

23:2 こう言われた。「律法学者、パリサイ人たちは、モーセの座を占めています。

23:3 ですから、彼らがあなたがたに言うことはみな、行ない、守りなさい。けれども、彼らの行ないをまねてはいけません。彼らは言うことは言うが、実行しないからです。

- 当時の教会には一般の人々だけでなく、祭司も大勢いました。

使徒の働き 6章

6:7 こうして神のことばは、ますます広まって行き、エルサレムで、弟子の数が非常にふえて行った。そして、多くの祭司たちが次々に信仰にはいった。

- ところが、このような人たちが教会の中で力を持っていました。そして熱心に聖書を読み、律法を研究していました。一方、ペテロ、ヨハネ、ヤコブは祭司でも神学者でもありませんでした。彼らの立場は次のようでした。

1 ヨハネ 1の手紙 1章

1:1 初めからあったもの、私たちが聞いたもの、目で見えたもの、じっと見、また手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて、

1:2 このいのちが現われ、私たちがそれを見たので、そのあかしをし、あなたがたにこの永遠のいのちを伝えます。

- つまり、聖書を研究してというより、彼らは実際に生ける神を経験した人たちでした。生ける神を実体験した彼らは、もう黙ってはおられませんでした。キリスト教会が平和的に発展して続けていた中であって、「言うだけで、実行しない」人たちがいました。
- 律法学者や祭司たちは、「言葉だけの人」で「実行の人」ではありませんでした。ヤコブはこのようなキリスト教会に、危機感を持っていました。そこでヤコブは、「馬とくつわ」と「船とかじ」を例に挙げて、ユダヤ人クリスチャン対して大切な信仰について語りました。

2) 馬とくつわ

- くつわとは馬を御するための道具です。くつわは正しい位置につけなければなりません。そうでないと、馬を御することができなくなります。くつわが正しい位置につけられることによって、人は馬を自由に操ることができるようになります。馬には馬の意思があります。しかし、小さなくつわをつけることによって、大きな馬のからだを自由に引き回すことができるようになるのです。

3) 船とかじ

- 次の実例は「船とかじ」ですが、船は風に吹かれるとある方向に流されて行きます。そのままにしておくと、風という自然界の力によって追い立てられます。しかし、どんなに大きな船であっても、小さなかじを操作することによって、思いどおりの方向に動かすことが可能です。

- ・馬とくつわの関係のように、船とかじの関係も、小さなものによって大きな船も、思いどおりに動かすことができるという真理が成り立ちます。
つまり、この二つの事例で教えられる点は、小さな舌から出る言葉が大きなことを引き起こすということです。

2. 舌が持つ力

1) 舌の使い方

- ・舌はからだの中では、小さな器官にすぎません。しかし、人の人生を動かすほどの重要な力を持っています。あの方の一言で、勇気を得ました。励ましを得ました。あの方の一言で、決心しましたと。つまり、言葉は人の人生を動かすものです。私たちは、日々どんな言葉を受けて発しているでしょうか。
- ・自分の口から出る言葉のマイナス面は、自慢したり、傲慢な言葉を吐いたり、他人を批判したりします。そして自らを墮落へと追い込んでいきます。しかし、プラス面の舌もあります。舌（言葉）を正しく用いるならば、私たちを霊的成長へと進ませてくれます。そして神からの栄誉を受けることができるようになります。
- ・もし、舌の使用法を誤るならば、神の訓練を受けることになり、神からの栄誉をのがすことにもなります。いかがでしょうか。私たちは外には見えない1枚の舌を持っています。私たちはどのように、制御しているでしょうか。
ヤコブは次のように勧めました。

1:19 **だれでも、聞くには早く、語るにはおそく、怒るにはおそいようにしなさい。**

2) 主に祝される使い方

- ・それでは、言葉を具体的に実践するにはどうすれば良いでしょうか。

① 心静めて、祈ること（間を置く）

- ・神のことばは肯定的です。励まし、勇気、力、導きを与えてくれます。
神は私たちの全てを知っておられるお方で、私たちの必要を全部ご存じのお方です。
聖書は次のように述べています。

詩篇 139 篇

139:1 **主よ。あなたは私を探り、私を知っておられます。**

139:2 **あなたこそは私のすわるのも、立つのも知っておられ、私の思いを遠くから読み取られます。**

139:3 **あなたは私の歩みと私の伏すのを見守り、私の道をことごとく知っておられます。**

139:4 **ことばが私の舌にのぼる前に、なんと主よ、あなたはそれをことごとく知っておられます。**

- ・この全能の神の前に、心を静めることは、上から知恵をいただく道です。

② みことばを蓄えること（デイポーション）

- ・私たちは心に聖書のことばを蓄えるならば、いつでも、どこでも、主である神とのお

交わりが可能となります。また、祈りが積まれ、みことば蓄えられるならば、日々遭遇する出来事で神のご介入の確認が敏感となります。

ここに私が常に語る、“experience your God”（あなたの神を経験しなさい）を自分のものとすることができます。

- ・詩篇の作者は次のように賛美しました。詩篇 119 篇

119:11 あなたに罪を犯さないため、私は、あなたのことばを心にたくわえました。

119:71 苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。

119:72 あなたの御口のおしえは、私にとって幾千の金銀にまさるものです。

119:103 あなたのみことばは、私の上あごに、なんと甘いことでしょう。蜜よりも私の口に甘いのです。

119:105 あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。

- ・いかがでしょうか。私たちはヤコブの勧告を思い出し、それを実行しようではありませんか。

ま と め

主 題：「舌 が も つ 力」
— 祝される用い方 —

- ・今日のメッセージをまとめてみましょう。私はヤコブの手紙 1 章 19 節のみことばをまとめたいと思います。

1:19 だれでも、聞くには早く、語るにはおそく、怒るにはおそいようにしなさい。

* God bless you !